

クルト・ケプルナー著
『戦争の国への旅—ユーゴスラビアでの—外国人の体験』
抄訳（4）

元 吉 瑞 枝

☆原著は次の通りである。

Kurt Köpruner: *Reisen in das Land der Kriege*
— *Erlebnisse eines Fremden in Jugoslawien* —
Überarbeitete Neuauflage: Diederichs im Heinrich Hugendubel Verlag,
Kreuzlingen/München 2003.

本号では、本稿（1）の目次概観（本誌第10巻第2号、68頁）で「<II> クロアチアでの戦争—1991年から1995年まで」と分類されたブロックのうち、前号（本誌第12巻所収）に続く箇所（原著82頁から114頁まで）について、一部は大意を、一部は全訳を掲載する。大意と全訳の区別は、章題のあとに明記すると共に、前者については、前号までと同様、前後に[]を付して示してある。（但し、[大意]と記された章においても、原著に添ってほぼ全訳または意識した箇所が多い。）

また章題についても前号までと同様、核となるもの（として原著に掲げられているもの）は★で、その下位におかれたものは*で示してある。

oo

★補足：歴史への問い [全訳]

どのようにしてヨーロッパの只中で、数十年間続いた平和のあとで、人々が再び武器をとる決意をするなどということが起り得たのだろうか。そんなことをすれば国も個々の家族もどんな悲しみに襲われることになるかは誰にもわかっていたにもかかわらず、また、多くの人が戦争とは集団的な自殺を意味すると確信し、相争っている党派のいずれも、未来のよりよい生活を可能にするような早期の勝利を収められるなどとは本気で考えていなかったに

もかかわらず、なぜそうなったのか。その答は、過去の中に見出されるに違いない。

従ってここで、紛争の歴史的な根へと視線を向けてみたい。ここ数ヶ月の私の会話の相手は、誰も皆一意識的である人も、あまり意識的でない人もいたが、彼らの現在の生活状態がどんなに大きく歴史的な経緯に由来するものであるかを語っていた。しかし同様にはっきりと感じとれたのは、彼ら各人の現在についての感じかたが各人の過去について抱いている像にどんなに強く影響を与えているかということだった。

* 「歴史」とは、いったい何なのか [全訳]

当時の私にとって、「歴史」といえば、まだ、主としてエジプトやギリシャやローマのことでしかなかったが、ここで私は、ごく近い過去の歴史もどんなに緊迫したものであるかを、いわば現場で経験したのだった。バルカンの歴史についての私自身の知識は、既に述べたように、当初は、かなり貧弱なものであった。私の新たな対話の相手—その数は常に増え続けていった—は、私にしばしば夜通しの「レッスン」を通して彼らの歴史観を語ってくれた。彼らの多くは、全く「普通の平凡な」人たちだったが、中には、真に権威ある人もいた。特にここで挙げておきたいのは、私が高く評価しているセルビアの作家、アレクサンダー・ティシュマ⁽¹⁾の名前である。私は彼と何時間も一緒に過ごした。彼の作品は90年代にドイツ語に訳され、マルセル・ライヒ・ラニツキー⁽²⁾の紹介により広範囲の読者を獲得した。

けれども私の「教師たち」の多くがどんなに信頼できる人たちだったとしても、彼らの教えの中には、互いに非常に矛盾しあうものがあった。それで私はたびたび本や事典の古いものを引っ張り出したり新しいものをたくさん入手したり、また、メディアのなかに出てきた歴史的な考察にも注意を払い、新たに得た認識を、自らの目と耳で体験したことと関係づけて考えようとした。歴史の認識とは、過去への、現在からの眼差しにほかならない。というのも、「客観的に歴史的」とは、そもそも何なのだろう？

或るとき或るところで何が実際に起こったのか、を知ろうとする者は誰でも、問いを立て、答えを探し、それらをその重要度において評価することを避けることはできない。歴史への問い。それについては、何をどのように問うかによって、常に異なるさまざまな答えがあり得るだろう。

たとえば私は、次のような問いを立てる。クロアチアにおける抗争は、い

つエスカレートしたのか、と。時代的な経過からみて、ほかならぬこの時点で抗争を爆発させた新たな本質的な事情とは何だったのか。また、地理的にみて、どこに抗争の根があったのか。このような問いから始めてみよう。

クロアチアにおける全抗争は、主に、いわゆるセルビア人が住民の多数を占めているあの地域、すなわち、基本的に、クライナ地方と東西スラボニア⁽³⁾のいくつかの地域をめぐって起こった。そこは、セルビア人が1990年代の半ばにクロアチアから分離し、のちに自らの共和国を宣言して数年間維持したが、最終的には西側の援助を受けたクロアチアによって追放された、あの地域である。従って、私の問いはこうなる。セルビア人たちは、そもそも、いつ、どのようにしてこの地域へやってきたのか。

* オイゲン公、トルコ人、セルビア人 [大意]

〔この問題については、ともかくも次のようなコンセンサスが存在する。17世紀に、まさに上述の地域を通して、アドリア海からハンガリーやルーマニアに至るまで、バナナ状に、西洋と東洋、ハプスブルグ帝国とオスマン・トルコ帝国の境界線が引かれた。この境界線は、既に4世紀末のローマ帝国の分裂にまで遡る。それは、数世紀にわたり戦争によって多少の移動は蒙ったが、常に明確な文化的な分割線をなしていた。すでに14世以降トルコは北進を開始し、1683年にウイーンの寸前まで迫ったが、オイゲン公⁽⁴⁾によって撃破された。しかしバルカンの大部分、それに伴ってセルビア人の主要な居住区は、何世紀にもわたって、トルコの支配下におかれたのである。このことが、その後のバルカンの混乱の根因になったといえるであろう。

トルコ人たちは、彼らが支配した民族に対して決して「控えめ」に対応したわけではなかった（このことは、たとえばイヴォ・アンドリッチ⁽⁵⁾の作品からも読み取れる）が、イスラム教への大がかりな強制的改宗という事態は起こらなかった。そのためセルビア人の大多数は、キリスト教の信仰—ローマ・カトリック教ではなく正教—にとどまった。しかしセルビア人、特にボスニアのセルビア人の一部はイスラム教に改宗した。それに対してトルコ側は大きな特権を与えて報いたとされている。

キリスト教にとどまった大多数のセルビア人は、数世紀にわたってトルコの支配からの解放をくりかえし試みたが、どの蜂起もオスマン帝国の軍団によって残虐な復讐に見舞われた。そのため、セルビア人たちは、いくつかの群れを成して、トルコの支配から自由な北方へと移動していった。このよう

な移住の最大のものは、17世紀に起こった。それは、ほぼオイゲン公の時代と重なるが、このとき、数万のセルビア人の家族が、コソボ⁽⁶⁾から出て、ハプスブルグ帝国の庇護のもとにヴォイヴォディナ⁽⁷⁾や今日のクロアチアに避難したのである。彼らには、このような境界地域が割り当てられ、また高度の自治権も付与されたが、このようなことは、ハプスブルグ帝国の治世においては例外的なことだった。地図を見てみれば、これらの戦闘能力を有するセルビア人たちが、ハプスブルグ帝国にとって、オスマン・トルコに対する防波堤としての重要な役割を担っていたことがわかる。

以上のことは、どのようにしてセルビア人が上述のクロアチアの領土にやってきたのかという問いに対する、ほとんど異論の余地のない解答であり、また、クロアチアに住むセルビア人が、自分達の祖先がすでに何世紀にもわたって当地に住んできた、と主張することについての説明でもある。また憎悪の根源についても、もしかしたらこれによっていくらか解けるかもしれない。というのは、この地域にもともと住んでいたクロアチア人たちは、この時代およびその後もずっとハンガリーの農奴という地位にとどまらねばならなかったのに対して、新たにやってきたセルビア人たちは、もっぱら「ウイーン」に直属し、信教の自由さえ享受していたからである。

しかしそれに続く数世紀の間は、強大なハプスブルグ帝国の支配下において、セルビア人とクロアチア人のあいだには、全体として見たところ、大きな衝突はなかった。セルビア人たちは、そこに新たな故郷を見出していった。ザグレブやリエカやザダルやスピリットののような都市に移っていった者も多くいたが、当地〔クライナやスラボニア〕にとどまった者の方が明らかに多かった。それらの地は、一部は大変肥沃なところもあるが、全く土地の痩せた田舎が圧倒的に多かった。

その後の重要な歴史的な出来事として確認しておくべきことは、500年続いたトルコの支配が終わった19世紀の半ば以降、セルビアの中心部に、独立国家建設の動きが起こり、1882年に「セルビア王国」が樹立され、同じ正教国のロシアと同盟関係を結んだことである。]

*ユーゴスラビアの誕生 [大意]

〔第一次世界大戦は、この地域にも決定的な変化をもたらした。大戦の引き金は、周知のとおり、セルビア青年によるサラエボでのオーストリア皇太子夫妻への狙撃事件だったが、当然のことながら根はもっと深いところにあっ

た。ヨーロッパおよび世界の支配権をめぐるヨーロッパ諸国間の対立は、二発の銃声で世界大戦を惹き起こすのに十分なほど激しいものになっていたのである。この4年間続いた戦争のあいだ、クロアチアとスロベニアはハプスブルグ帝国に所属することから必然的にドイツ・オーストリア側に立った。他方、「セルビア王国」は、セルビア人、ガブリロ・プリンツィプによって起こされた狙撃のためにオーストリアから集団的な制裁を受けることになり、その反対側、すなわち協商国側に立った。最終的に後者が勝利し、巨大なハプスブルグ帝国は崩壊した。そのさい、帝国の北部および南部にいた数多くのスラブ諸民族はどのような道を辿ったのか？

約200万人そこそこのスロベニア人とおよそその2倍の数のクロアチア人は、数世紀来のオーストリアの支配から初めて解放されたが、独立した国家を築いて周辺の強力な諸国家に対抗していくには弱体でありすぎるとみずから感じていた。特に、大戦の勝者であるイタリアが、南チロルだけではなく、スロベニアおよびクロアチアに対して領土的な野心を高めていたからである。

このような状況のなかでスロベニアとクロアチアは勝者のセルビアと交渉して、共通の国家「ユーゴスラビア」（「南スラブ」の意）を創設することを模索し、こうして最初の南スラブの多民族国家「セルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国」が誕生した。この理念は新しいものではなく、既に数十年前にクロアチアのカトリックの司教であったシュトロスマイヤー^{*1}によって唱えられたことがあった。ただ新しい「ユーゴスラビア」はその概念を転換させたもので、シュトロスマイヤーの定義においては含まれていたイタリアがこれからは締め出され、イタリアには、イストリアとダルマチアのごく一部（ザダルを含む）のみが残された。

しかしこの国家建設は、諸民族による広範囲な意思形成の結果というよりは、少数者による孤独な決断とっていいようなものだった。その中には、世界大戦の勝者によってオーストリアと一緒に制裁されたくないがために一時的にセルビアと結びつくことを望んだ者たちもいた。またほかの諸前提も欠けていた。すなわち、その新しい国家は、第一次大戦の経済的・政治的瓦礫の中から一挙にハプスブルグ帝国の支配構造に代わる制度を創り出さねばならなかった。加えて何度も経済危機に見舞われ、極度の悲惨と貧困に陥った。

スロベニアとクロアチアは、数世紀来初めて外国の占領軍のいない状態となったが、民主主義の伝統の弱いまま王国に統一された。しかし最初の数十年のあいだにともかくも内閣、軍隊、警察を有する国家を創らねばならなかった。そのため—先述のアレクサンダー・ティシュマが語ってくれたところに

よれば一すでに存在していたセルビアの機構を拡大することになり、それが他民族の不満の種ともなった。ともあれ、セルビア王アレクサンダーは、民族間の平等をめざして努力したといわれている。^{*2} 彼は立憲君主制をめざしたが、議会や民主主義が効力を発揮するにはまだ機が熟してはいなかった。彼の治世の最初の10年間で、ニダースもの政権が挫折したため、1929年独裁王制を敷くことを余儀なくされた。このことは今日でも非難されているが、当時、他の国、たとえば長く王国だったオーストリアではどうだったのか、ということに思いを致してみれば、ユーゴスラビアの議会がどういう事態だったのか、想像がつくだろう。会期中の公道や議会内でさえ殺害事件が起こったのである。我々は看過しがちであるが、アレクサンダーがこのような議会を無効にしたのと同じ時に、ウィーンとベルリンではようやく議会が開設されたのである。]

*太古の現象 [大意]

〔第一次大戦後、新しい、というよりむしろ太古の、といった方がいい現象、アインシュタインが「諸民族の小児病」と名づけたもの、この地域ではこれまで幸か不幸かオスマン・トルコやハプスブルグ帝国の権力によって抑えつけられていたもの、すなわちナショナリズムが次第に大きくなり、重大なものになってきた。「小児病」とは、言い得て妙ではあるが、事柄の一面しか言い当ててはいない。というのは、ナショナリズムは、諸民族を相互に相争わせて支配するという、昔からの支配の処方箋でもあるからである。そこから利益を得るのは、自分達の意のままになる領土を拡大しようとの意図のもとに諸民族を相互の憎悪へと駆り立てている少数の支配者のみなのである。〕

この歴史的な段階において、様々の異なる（矛盾しあう）逸話があるのも不思議なことではない。クロアチア人は、当時迫害され抑圧されていたので、その数年後にすさまじい怒りと共に爆発した憎悪はそこに根をもっているという見解で一致している。セルビア人はそれに異議を唱え、もし王国で自分達が本当に特権をもっていたのなら自分達をクロアチア人から分離させるよう王に迫っただろうが、そんなことは起こらず、逆に、王の方からそのような分離を提案されたクロアチアの方がそれを望まなかったのだと言い、国境をバルカンにまで拡張しようとしていたムッソリーニのイタリアに抗する防壁としてクロアチア人がセルビア人を必要としていたのだ、と主張する。〕

* ウスタシャ [大意]

〔こうして1929年には彼らはまだ共通の国家のもとにとどまっていたが、嵐は迫っていた。クロアチアの独立をめざす地下運動が起こっていたのである。それらの運動の一つが、「ウスタシャ」（「暴動者」の意）である。「ウスタシャ」は決して唯一の運動でも、また特に大きな運動でもなく、党員は400名だったといわれている。しかし彼らには、ローマ教皇とムッソリーニという強力な後ろ盾があった。ウスタシャは、1934年ユーゴスラビア国王アレクサンダーをマルセイユで暗殺し、フランスの外相ルイ・バルトゥーも巻き添えにするという挙に出た。この運動の首謀者アンテ・パヴェリッチは、みずから「総統」と名乗るのを好んだ公然たるファシストだった。彼は、フランスの法廷で欠席裁判のまま死刑を宣告された。

パヴェリッチによる国王暗殺を支援したムッソリーニは、いまや、セルビアとクロアチアのあいだに内戦を起こし、それによってイタリアの国境を、バルカンの深部にまで進めようという目論見^{もくろみ}を抱いていた。他方ドイツは、第一次世界大戦の敗北後に登場したヒトラーの下で迅速に立ち直って強力となり、1938年オーストリアを併合し、1941年—ハプスブルグ帝国の崩壊から23年後—ドイツとオーストリアは「彼らの」バルカンを取り戻し、それをムッソリーニと仲良く分け合った。それは、これまでも十分に厳しい試練にさら^{さら}曝^{さら}されていたこの地域の最も暗い歴史の一章となった。ベオグラードがナチスによって爆撃された数日後に、ユーゴスラビアは降伏し、崩壊した。

進軍してきたドイツ軍—その大部分はクロアチアやスロベニアの住民から構成されていた—は、3年前のウイーンでそうだったように、大きな歓呼の声で迎えられ、クロアチアに、自治権をもった衛星国「クロアチア独立国」が樹立され、ボスニアおよびヘルツェゴビナもそれに組み込まれた。それは、わずか数年存続しただけの人為的な国家像だったが、多くの人々の頭のなかに50年後も「大クロアチア」として亡霊のように現れることになった。ユーゴスラビアのその他の部分については、ダルマチアとスロベニアの半分およびコソボ（とアルバニア）はイタリアに、ヴォイヴォディナの大部分はハンガリーに、マケドニアは、ドイツと同盟関係にあったブルガリアに、セルビアとモンテネグロはドイツに占領された。

クロアチアにとっては、1000年の時を経て、みずからの時代がやってきたのだった。ドイツは、新しい国家の統治者として、思想的にナチスと合致するウスタシャの党首アンテ・パヴェリッチを据えた。ウスタシャ政府の目標

は、すべてのセルビア人やユダヤ人やジプシーおよびその他の「ならず者ども」を一掃して10年以内に純粋なクロアチア国家を樹立することであった。当時、「大クロアチア」の領土には、およそ200万人のセルビア人がいた。当時のウスタシャの「人種問題」担当大臣であったミレ・ブダクは、上記の目標を達成するための処置として、セルビア人の三分の一を抹殺し、三分の一を追放し、三分の一を強制的にカトリックに改宗させると公式に表明した。そしてこれが単に言葉だけではなく実行に移されたことを、多くの報告が語っている。彼らは、どこであれ、セルビア人をつかまえると殺害した。セルビア人たちは数万人単位で、生きたまま、あるいは死体となってダルマチアのカルスト台地に放り出されたり、あるいは正教の教会に集められ、そこで殺害されたりした。強制収容所があちこちにできた。そのうち最大で最も悪名高いヤセノバツ収容所では、数十万人のセルビア人、多くのユダヤ人およびジプシーが虐待され、射殺され、斧で殴り殺されたり、サーベルで首を刎ねられたりした。^{*3}

このような理解しがたい犯罪をさらに理解しがたくしているのは、これらのことがカトリック教会とイスラム教の指導者の承認や委託のもとになされたという事実である。ムスリム [イスラム教徒] は、ウスタシャの国家において指導的な地位にあった。ザグレブの大司教だったアロイジエ・シュテピーナツは、ウスタシャの国家を文字通り「天国」とか「神の作品」とみなし、司祭たちに天国の建設に励むようにと指示し、数百人の司祭たちが、命じられた通り、「神がお望みになっている」との掛け声のもとに虐殺に携わった。これ以上の倒錯は考えられるだろうか。しかしそれは実際に起こったのである。「私たちは君たちの命ではなく、魂を救いたい」^{*4} という原理のもとに大量の洗礼が組織され、こうして洗礼を受けたセルビア人たちが、その直後に機関銃で天国に送られた。この話を初めてヨシブ⁽⁸⁾ から聞いたとき、私は笑い飛ばした。しかし、数年後、これについての映像記録を見たとき、その笑いは消えた。

殺害されたセルビア人の数が一年後に数十万人に上ったとき、さすがのナチスにとってもやり過ぎと思われ、数名のSSおよび国防軍の高官がヒトラーに宛てて抗議文を書き、このような野蛮な行為を終わらせるようにと強く訴えた。彼らは、ウスタシャの犯罪が、生き残っているすべてのセルビア人たちをチトーのパルチザンのもとへと走らせるのではないかと恐れたのである。ヒトラーは、当時これには返事を出さなかったが、伝記によれば、ウスタシャにはいましばらくやらせ、然る後、適当な時期にウスタシャを切ってしまお

う、と側近に語ったとのことである。こうしてウスタシャはさらに2年以上ものあいだ虐殺を続けることができた。

ウスタシャの猛威についてはこれ以上の詳述は省くが、次のことだけは書き留めておきたい。ウスタシャの国家で当時何が起こったのかについて感じとることのできる者だけが、およそ50年後にウスタシャが再生したときに、クロアチアに住むセルビア人が抱いた恐怖を理解することができるのだ、ということ。]

* パルチザン [大意]

[当時のクロアチア人を判断するにあたって重要なことは、決してすべてのクロアチア人がこのような動きに同調したのではないということである。全くその反対に、これと戦うパルチザン運動が組織され、それは主にクロアチア人によって担われたのである。そのことは、単に、チトーと呼ばれた*⁵ ヨシプ・ブローズがクロアチア人—母はスロベニア人—だったということにとどまらない。

パルチザンの主力は коммуニストであった—その中には、のちのクロアチア大統領のツジマンもいた—が、クロアチアおよびボスニアのセルビア人農民のように明確な革命的イデオロギーのない部隊や、ダルマチアのクロアチア人やアルバニア人のようにイタリアからの解放運動に動機づけられた部隊も加わり、スロベニアやヴォイヴォディナやモンテネグロやマケドニアの地下運動やナチスが最も残虐にふるまったセルビアにおける地下運動等が合流し—ドイツやイタリアの коммуニストも参加していたとのことである—、急速に増大していった。しかし彼らは皆、最終的にすべての南スラブ人たちの共通の一つの国、「ユーゴスラビア」という理念に基づいて共に戦った。チトーが1943年11月29日に地下から共和国の樹立を宣言したときも、そのような「ユーゴスラビア」共和国が視野に収められていたのである。

パルチザンは、あらゆるところで、ドイツ、イタリア、ウスタシャ、ムスリムとアルバニアのSS部隊や、さらにセルビア王政派のチェトニクとも戦った。あらゆる側から、パルチザンの側からも、住民に対して想像を絶する犯罪が行われた。しかしここに挙げたすべてのグループには、いまなお崇拜者がいて、彼らは、「ただ復讐から」そうしただけだと主張している。

ドイツはチトーに莫大な金額の賞金を賭けたが、彼を密告する者は誰もいなかった。連合国側に支持されていたことやドイツの戦況がその後悪化して

いったことなどに助けられていたとはいえ、パルチザンが最終的に勝利したことは奇跡といってもいいことであった。それは、もしメンバーを互いに結びつけていたあの強力な理念がなかったら、考えられないことだった。

こうして第二次大戦は第一次大戦と同様の結果に終わり、再びセルビアは勝利者の側に立ち、クロアチアは敗者になった。ウスタシャの殺し屋の多くはナチスの高官たちと同様一逃亡し、自らの犯罪に対する釈明に引き出されることはなかった。彼らが世界のあちこちに逃亡する前に一時的な避難所を提供したのは、ナチスの場合と同様、バチカンだった。その後、彼らは、アルゼンチンやカナダやオーストラリアやベルギーや、その他世界の多くの国々に身を潜めた。アンテ・パヴェリッチは、スペインで50年代末、フランコ政権の時代に平和裡に埋葬された。パヴェリッチの最も親しい友人であり、一時ウスタシャ軍の教父でもあった大司教のシュテピーナツは、90年代末に、ローマ法王ヨハネ・パウロⅡ世によって祝福され、福者の列に加えられた。

しかし、セルビア人やユダヤ人を排した純血のクロアチア国家というウスタシャの理念は、一時は、無効になった時代があったのである。クロアチア人であるチトーの下で、死刑宣告が下されたのだった。だが理念というものは、その良し悪しにかかわらず、長い生命をもつものである。]

*チトーの残虐行為 [大意]

〔ところでタイミングよく逃亡できなかったウスタシャたちはどうなったのか。彼らは、チトーのパルチザンによって数千人規模で殺害されたのである。「ブライブルグ」は、オーストリアとスロベニアの国境にある地だが、のちに無数の骸骨が見つかった場所として、多くの人の記憶に残っている。また、ウスタシャのみならず、ヴォイヴォディナやスロベニアに定住してもう既に長くその地に定住していたドイツ人、いわゆるドナウ・シュワーベン人に対しても、ナチスの犯罪を理由に、血なまぐさい復讐がなされた。非常に多くの人々が殺され、他のほとんどすべての人たちは追放された。チトーは、空になったドイツ人たちの家の多くを、コソボのアルバニア人から追放されて逃れてきたセルビア人たちに与えた。

しかしチトーが殺害したのは、単に当時のパルチザンの敵や敵国の側に立っていた人間だけではなく、のちの政敵も含まれていた。アドリア海沿いにリエカからザダールまで、カーブの多い、素晴らしい景色の海岸沿いの道を走ると、「ゴリ オトク」(「裸の島」の意)という島のそばを通るが、これは、

チトーの政敵たちの怖ろしい牢獄であり、多くの者が、裁判にかけられることもなくここへ連れてこられ、二度とここを出られないまま死んでいったのである。

もしチトーがセルビア人だったら、今日の反セルビアのキャンペーンにとっては、事はずっと簡単なのだが・・・]

*チトーのユーゴスラビア [大意]

[けれどもチトー政権下でなされたすべての犯罪は、ウスタシャおよびその後援者たちが行った残忍な行為との関連においても見なければならない。このことは決して、それらを免除するということを意味しはしない。しかしチトーの時代が、相対的にみて、この地域がこれまでに体験した最も幸福な時代だったことも否定できない。ナチスの時代に互いに激しく傷つけ合った多くの民族グループが同じ地域に一緒に暮らし、精神的物質的な廃墟の中からすばやく一つの国家を建設し、世界規模の高い評価を得たというのは、マーシャル⁽⁹⁾にも匹敵するような天才的な業である。それも、互いを結びつけるあの強力な理念がなかったらありえないことだったろう。

けれども以上のことだけでは、チトーの複雑な人間性についてまだすべてが言い尽くされたわけではない。彼は王以上の権力をもって、その国を、たとえば私の故郷のフォアアールベルクに住むユーゴ人⁽¹⁰⁾たちからもあんなにも愛され、彼らのほとんどすべての人がまた帰りたいと思うような国にしたこと、それはまず何よりも彼の人間的な功績である。チトーは、大戦後3年にして、その国をスターリンのヘゲモニーから完全に解き放ち、対立する東西の二ブロックのあいだで賢明にふるまった。⁽¹¹⁾

我々からみれば、「ユーゴスラビア」という言葉は、常に困窮と悲惨の同義語であり、それは当たっている—もしそうでなければ、どうしてあんなに多くの人々が我々のところへ働きにきただろう—、我々の発展と比較すれば、ユーゴスラビアは、明らかにいつも遅れをとっていた。だが他面、非常に大きな産業力が築かれたことも否定できない。これは特に、機械製作および設備製造業、電気機械工業、農業および観光業についてあてはまる。医療や教育やスポーツも高い水準に達していた。けれども特に成功したのは、残念ながら軍需産業だった。

亡くなったマリアの夫のボラン⁽¹²⁾は、私にこう語ったことがあった。「私は、以前は、チトーを神様のように尊敬していた。けれども今は、彼が愚か

者だったことがわかった。彼は、武器を次から次へと作らせた。彼は我々に、それは自分達を守るために必要なのだと説明していた。でも彼は我々のことをもっとよく知り、予見すべきだったのだ、我々がその武器を我々同士のあいだでお互いに向け合うことになることを・・・」と。ボランはおそらく正しい。これが他の地域にもあてはまる事実だとしても・・・また最終的に、自国産の武器によって殺されるのか、輸入した武器によるのかを問うことも、あまり意味がない。いずれにせよ、軍需産業はよい商売になるのだ。そしてチトーといえどもこれを免れなかったのである。]

*チトーの民族政策 [大意]

[のちのユーゴスラビアにおける紛争の種は、チトーの時代にすでにあり、この問題に対する彼の政治のなかにもあった。チトーは、前述のように、様々な奇跡を成し遂げたが、ナショナリズムを持続的に抑えるという試みにおいては、少なくとも結果的にみて失敗したといわざるを得ない。

彼は、経済を各共和国間で噛み合わせ、ナショナルなものをフォークロア的なものに還元し、少数民族を単に保護しただけではなく具体的にそのポジションを高め、連邦制を強化し、あらゆるナショナルな運動を、強権をもって抑えた。しかし、ユーゴスラビアにおけるすべての民族のある程度の平等をめざすこの試みは、単純に数の上からいっても、難しい問題に直面した。すなわち当時の人口分布は、セルビア人が36%、クロアチア人が20%、ムスリム人—チトーによって独自の民族グループとして認められた⁽⁴³⁾—が9%、スロベニア人8%、アルバニア人8%、マケドニア人6%、モンテネグロ人2%、ハンガリー人が2%となっており、また残りの8%のうち、5%がユーゴスラビア人と名乗り（彼らは特定の民族集団に所属することを望まなかった）、3%が、その他の16の国々の出身者、すなわちトルコ人、スロヴァキア人、ルーマニア人、ブルガリア人やロマ等から成っていた。^{*6} このような状況で、どのようにして民族間のバランスが見出されるだろうか？どのようにしてこの問題を解決したらいいのだろうか？

チトーは、共和国のあいだに境界線—彼の死後10年経って、それをめぐって戦争が起こったあの境界線—を設けた。こうしてユーゴスラビアは、1963年と1974年の憲法で6つの共和国に分かれた。中心はチトーの力で強固なまま維持されたが、各共和国は大きな主権を有するようになった。けれども境界線は、どのように引かれるべきだったのだろうか？北部のスロベニア

や、セルビアの中心部であるベオグラードからニシュまでは比較的明瞭だったが、その他の広い地域はすべて、国籍が入り混じった混住地帯であり、至るところにセルビア人が入っていた。

チトーの考えは、数の上で優っているセルビア人を、すべての共和国に配し、その支配力を調整するということにある。これによってセルビア人は、セルビア共和国を除く各共和国において強力な少数派となったが、同時に、自らの住む各々の共和国を強化することになった。各共和国の境界線の画定においては、チトーは、第一次大戦前の時代のものに拠ったが、それは当時も、民族的な境界線に合致しておらず、オーストリアとトルコの戦争の結果によるものであった。

これによって、完全にバランスをとることはできなかったが、重心は明らかに分散された。特にセルビア共和国においては、北のヴォイヴォディナと南のコソヴォが自治洲となり、セルビアの影響力は明らかに減じられた。従って、チトーの意図は外れなかったといえるが、それには、セルビア人たちが協力したということが前提になっていたのである。このことは今日、不当にもあまり顧みられていない。これらの共和国は、一定の条件の下ではユーゴスラビア連邦から脱退する権利を有しているということも憲法に明記されていた。しかし同じ憲法に、その脱退の権利は、*個々の共和国の一方的な宣言によるものではなく、他のすべての共和国の了解のもとにおいてのみ認められる*、ということも記されていた。もしセルビア人が、この憲法が定められた1974年に、20年後の連邦の解体を予感していたら、事態は違ったものになっていたことだろう。

チトーは強権をもって諸民族をまとめていたが、高齢になって力が弱まり始めたとき、みずからの根拠でもありパルチザン運動の母体でもあった共産党に力を注ぎ、それを6つの共和国をまとめる手段にした。チトーの政権は、ソ連のヘゲモニー下における諸国家と比較すると遥かにリベラルであったが、その下にあっても、社会的な複数主義は、警察国家的手段で抑圧されていた。しかしまさにそのような独裁体制が同時に国内平和を保障していた。そしてこのような独裁制が崩壊したとき、紛争がエスカレートしたのである。というのは、そのような独裁制は、ナショナリズムの悪魔を追い出す別の（社会政治的な）悪魔だからである。悲劇なのは、ユーゴスラビアの場合—否、ユーゴスラビアに限らず—、各個の発展の可能性の抑圧か、相互の衝突か、という救いようのない二者択一しかなかったことである。]

* 共産主義者同盟の終わり [大意]

〔1980年5月チトーが死去した。彼が有していた権力は、共産主義者同盟に移行した。その後まもなく、コソボで問題が発生した。⁽⁴⁾ (のちの1987年に、スロボダン・ミロシェビッチ⁽⁵⁾が対処することになった問題である。) その上に、70年代の石油危機に端を発する激しい経済危機に見舞われた。石油危機は、西側諸国のみならず、それ以上にユーゴスラビアと、それまでユーゴスラビアの産業の取引相手だった第三世界の国々に大きな打撃を与えたのである。また多くのさまざまな国内問題もあった。政治的な決定機構が非常に複雑であるため、緊急の改革が不可能であり、各共和国は、連邦政府の措置に対して拒否権—これもチトーの遺産の一つである—を行使した。その上、腐敗や汚職も起こった。紙幣が不断に発行され、信じられないようなインフレになった。

この党の最後のあがきを詳細に見てみるなら、一方に、常にトリックを用いながらすべてを破壊したミロシェビッチのような人物がおり、他方に、ずっと前から複数政党の体制に向かって準備していたスロベニア人などがいたことがわかる。後者は、共産主義の支配の終わりを意味していた。我々にとっては、もちろん複数主義に共感する方が千倍も簡単である。我々の誰が、一党独裁の国家に住みたいと思っているだろうか。しかしこの党が、前述のようにユーゴスラビアでは、そしておそらく当地に限らず、ナショナリズムをストップさせていた力だったのである。

経済が回復するかのように見えていた丁度その時期に、あらゆることが勃発した。ユーゴスラビア連邦の最後の首相であったクロアチア人のアンテ・マルコヴィッチは、紙幣の製造をやめさせ、世界銀行と連携し、西側世界で高い声価を得た。彼は、ユーゴスラビアの維持のために果敢に戦い、みずからの政党を立ち上げさせた。そしてリュブリャナとザグレブの議会で、両国の独立宣言⁽⁶⁾の直前、ユーゴ連邦からの一方的な脱退宣言に対して激しい言葉で警告を発した。これまでの歴史において、世界のいかなる国も、そのような分離をたやすくやり逃げたところはないし、多民族国家ユーゴスラビアにおいて、それは決してうまくいかないだろう、と。しかし彼がザグレブのクロアチア議会の議員たちの前で、「諸君の子供たちは、武器ではなくコンピューターを必要としている」と叫んだ時、危うく殴られそうになったのだった。

次第に、ユーゴスラビアの解体を目指す勢力の方が強くなっていった。我々

のメディアや政治家たちの多くがこのような勢力に喝采を送り、その結果どうなるのかを知らながら、彼らを唆^{そそのか}しつつ強力に支援したことは、私にとって、近年の歴史上の、一つの、否、我々の恥である。けれどもそれを恥と感じている者は、我々のなかにはほとんど誰もいない。]

*最初の自由選挙 [大意]

〔共産主義者同盟の最後の党大会は、1990年1月に行われ、それをもってその組織は終わりとなった。各共和国の同組織の支部は、各共和国における最初の選挙には、まだ登場したが、対立候補があったところではどこでも敗れたため、速やかに解散し、他の国でもそうだったように衣装変えし、「社会主義」と改名した。

スロベニアでは、長い準備期間を経て既に1990年春に議会選挙を行い、野党連合の「デーモス」が勝利した。しかし共産主義者は大統領選挙には勝利し、ミラン・クーチャンが選ばれた。彼は、共産主義者同盟の解体の最終段階でセルビアに最も激しく立ち向かった当人である。

クロアチアでも似たような状況だった。そこでは1990年4月末に新たに登場したHDZ（「クロアチア民主同盟」）が圧倒的な勝利を収め、共産主義者はわずか10%にとどまった。

デーモスもHDZも、「ユーゴスラビアとの訣別！」という明確なプログラムを掲げて選挙に勝利したのである。短い期間ながら稔り豊かだったユーゴスラビアという美しい理念は、もう完全にお役御免になった。しかし、それと共に、スロベニアとクロアチアの共通性も失われたのである。というのは、「ユーゴスラビアとの訣別」というスローガンの意味するものが、ほとんどスロベニア人しか住んでいないスロベニアとクロアチアでは全く違っていたからである。]

★ツジマン、新生クロアチアの父 [大意]

〔HDZ（クロアチア民主同盟）の党首フラニョ・ツジマンは、かつてバルチザンの将軍だったが、すでに60～70年代の民族主義的な活動、いわゆる「クロアチアの春」⁽¹⁷⁾と関わってチトーの不興を買い、しばらく投獄さえされていたという人物であった。彼の部隊は、ほぼ専ら、時と共に「練磨された」かつての共産主義者たちから成っていた。彼らは大金を持っていた

と推測されるが、その金の出所が国外の亡命クロアチア人だということは、公然の秘密だった。彼らが、いつ、なぜ亡命したのか、についても話題になっていた。彼らの多くが、パルチザンの復讐を免れるために逃亡したのである。そのなかには、チトーから、ウスタシャの犯罪者として死刑を宣告された者もいた。いまや、約50年後に、彼らの時代がやってきたのである。

金を出す者は口も出す、HDZのプログラムはまさにそのようなものだった。すでにHDZの選挙運動について、多くの識者が文字通り「ウスタシャ・ルネサンス」と呼び、シュピーゲル誌も、「HDZは、大クロアチアを夢みている過激なグループで、隣のボスニア・ヘルツェゴビナに対して領土的野心を抱き、セルビアに対して狂信的な憎しみを広めている。[……]*7」と書いていた。

それならどうして、このようなプログラムをもったHDZが、選挙であるように歴然とした勝利を収めることができたのか。私はこのような疑問を多くの人たちに投げかけたが、これに答えられる当事者はあまりいなかった。私が尋ねた人たち、そして現実的な答えを期待できる人たちの多くは、選挙に参加しなかったからである。全体の投票率も低く、どの民族グループに何人いるかという確認に終わったといわれたが、いずれにしても、HDZの大勝利となり、それに基づいて、その後のことが展開していったのである。]

*ウスタシャ・ルネサンス [大意]

〔クロアチアを訪れた人にとって—そして当地の住人にとってはもっといっそう明らかに—新しい時代が始まったことの最もはつきりと目にみえる^{しるし}徴は、クロアチアの紋章の再生だった。古いクロアチアの紋章は、赤と白が格子模様^{しるし}に並べられているものだったが、これが実際に使われたのはウスタシャの時代であり、当時この旗印の下で、多くのファシズムの犯行が行われたのだった。チトーの時代にも、この赤と白の格子模様はクロアチアの国旗に組み入れられてはいたが、外観は全く違った印象を与えるものだった。

HDZの政府が最初にとった措置の一つは、この国旗を再びウスタシャふうに表現することだった。それは至るところで素早く行われ、公共の建物や多くの個人の家、自動車、ショーウィンドーや街灯の柱などがウスタシャの旗で飾られた。しかし国内外から激しい批判を浴びた結果、次のように多少の修正が施された。ウスタシャの国旗は、赤と白の格子模様の左上が白だったのに対して、熱い議論の結果、左上を赤にすることを取り決めた。しか

しその違いは、よくよく見なければわからなかった。

その他に1年以内に起こったことを列挙すれば、次のようなことである。

- ・官職、特に警察や司法官庁からの、純粋クロアチア人でない人物の追放
- ・セルビア人および不都合な人物のジャーナリズムからの解雇
- ・学校における浄化、セルビア人教師の解雇
- ・メディアの反セルビア、反ユーゴ、反連邦軍の扇動およびクロアチア賛美
- ・人種主義的な思想の公然たる宣伝
- ・クロアチア領土防衛隊の武装とそれによるセルビア人への攻撃（例：ザダールでの事件⁽¹⁸⁾等）
- ・1990年12月「クロアチアはクロアチア人の国である」とする憲法の制定
- ・公用語および道路標識におけるキリル文字の禁止
- ・セルビア人の住む公用住宅の接収
- ・ウスタシャの英雄名を冠したものへの、道路や広場の名称変更
- ・ウスタシャの公然たる宣伝、たとえば、ウスタシャのU（鉤十字に対応）を警察や軍隊の制服等につけることに対する容認 等々。

その上、過激な亡命クロアチア人たちが政策に強い影響力をもっていた。ツジマンでさえ、彼らと比べれば穏健に見えるほどだったが、彼は、彼らから「純粋なクロアチア人国家」を実現するよう迫られ、また彼らを、大臣を含む決定的なポジションにつけなければならなかった。

以上が、新生クロアチアの政治のおおよそのシナリオだったが、それについては、まだ誰も真剣に異議を唱えてはいない。]

*ウスタシャ・ルネッサンスに対するドイツとオーストリアの反応 [大意]

〔クロアチアでの出来事は、我々のメディアでも報道はされたが、あまり大きくは扱われなかった。それは、我々のあいだで流布している民主的、文化的で西側志向のクロアチア人というイメージに合わなかったからである。彼らの言語道断な振舞いが報道されるときには、ツジマン大統領がセルビア人に対して「あまりデリカシーのない」扱いをしたというコメントが添えられることが多かった。ウスタシャの残虐行為を目の前に見ながらのものであっただけに、それが些細なことでもあるかのようなこのようなコメントは、グロテスクだったと言わざるを得ない。〕

*クロアチアに住むセルビア人の反応 [大意]

〔彼らには大戦中のウスタシャの記憶が蘇り、パニックと不安に陥った。多くの者が、テロに対してみずからのテロで反応した。というのは、クライナの田舎やスラボニアの特定の地域のセルビア人たちの中には、クロアチア人の場合と同様、狂信的なナショナリストがいたからである。双方の側にとって、過激主義者の時代がやってきたのである。また、小さなグループに端を発した狂信的な行為が他のほとんどすべての人を巻き込んだということや、双方の代弁者が互いに相手方の狂信性を非難し、その材料がたくさんあったという点が、双方に共通している。〕

クライナのセルビア人は、コソボのアルバニア人が1990年の時点で有していたような自治権を要求した。ツジマンがこれを拒否したのに対して、セルビア人は1990年9月に自治区を宣言し、みずからの警察や議会を創設した。そのために、この地域に住むクロアチア人は、クロアチアの他の地域に住むセルビア人と同じ困難な状況に陥った。のちにクライナ・セルビア人共和国の大統領となったミラン・バビッチについて、単に狂信的なナショナリストであっただけではなく、みずからの手で人を殺し、私財を肥やした犯罪者であったとの証言がある。彼は直ちにミロシェビッチの信用を得、両者は互いにみずからの目的を達成するために利用しあった。

ここでユーゴスラビア連邦人民軍JNAについて補足しておきたい。JNAは、共産主義者同盟の消滅後、諸民族、諸共和国を横断する唯一の組織で、ある程度人々のなかに根を下ろし、ザグレブからドゥブロブニクに至るまで、どんな小さな村にも、もちろんクライナにも存在していたが、クロアチアにおいては、6月25日の独立以来、占領軍とされた。兵士の多くは一たとえば前述のアリフ¹⁹もその一人である一投降した。残った者たちは、当初、セルビアのために軍務に就こうとする者たちと、いまだにユーゴスラビア的使命のために働こうとする者たちの2つのグループが存在した。後者は、最初はおそらく多数派だったであろうが、次第に消滅し、前者のみが残っていくようになった。その転換点は流動的であり、部隊によって異なっていた。

これをもって、私が（旅の）報告を打ち切った時点に再び到達した。いずれにせよ、以上は、これから記述することの前史について記したものである。〕

★あらゆる前線での戦争

[全訳]

私は個人的な手記に立ち返ってたくさの事を書くことはできるが、1991年秋に起こったいくつかの戦闘についていくらか時系列的に順序だてて描写することは簡単ではないことを確認せざるを得ない。あまりにも多くのことが、様々な前線や色々な政治的な領域で起こったからである。ともかく、クロアチアのほとんどすべての地方で、北東のヴコヴァルやオシェクから中部のカルロヴァツを越えて南部のドゥブロブニクに至るまでそうだった。

ザダールも容赦なく巻き込まれた。街の境界から3キロメートルしか離れていないところに前線があったので、数ヶ月にわたって街全体が、榴弾による砲撃の下にさらされ、その都度、それを告げる警報が響きわたった。数百人が死に、それ以上の数の負傷者が出、不治の傷害を負った。私がいまでも良い関係を持ち続けている知人ツァーヨの当時未成年だった息子も、庭を走って通り過ぎたとき、榴弾の破片が当たって死亡した。

クライナのセルビア人たちは、街のすべての電気と水を止め、断水はその上数年続きさえした。クライナに住んでいた数万人のクロアチア人たちは事実上全員、避難せざるを得なかった。ザダールは、彼らの主たる避難所の一つとなり、街のあらゆるホテルが90年代の半ばまで、難民で超満員となった。逆に、アドリア海沿岸に住んでいた非常に多くのセルビア人たちが追放された。

外国のどこかに親戚や知人のいる者たちは、この国を離れていった。兵役に適した者は全員招集された。その中には、ロマン⁽²⁰⁾のように私の知人も多くいた。ニナは、当時2歳の息子ゴギと一緒に、プーラの避難用ホテルで何か月も過ごしたあと、アシャッフエンブルグの友人たちのところへ身を寄せた。ゴギの姉のアナは、9月末に、レーゲンスブルグの私たちのところへやってきて、ここでほとんど丸一年アテナ⁽²¹⁾と一緒に学校へ^{かよ}通った。

最も激しい戦闘は、スラボニアおよびクライナの、セルビア人によって占拠された地域において起こった。セルビア人は、すでに1990年に彼らが自治区として、のちに共和国として宣言したそれらの地域に加えて、連邦軍ないしその残存部隊の援助により、さらに大きな地域を征圧した。1991年の年末には、クロアチアのおよそ三分の一がセルビア人の支配下に置かれた。

全体の状況からみてどっちみち大差はないとしても、連邦軍の残存部隊はセルビアからクロアチアに進軍してきたのではなく、大部分はすでに数十年前から当地に駐屯しており、クロアチアの一方向的な独立宣言によって占領軍

にさせられたものであることを確認しておきたい。但し、そのことは、彼らがベオグラードから自立して行動したという意味ではないし、また、セルビアやまだユーゴスラビアに属している他の共和国からクロアチアにやってきて戦った多くの新兵がいなかった、という意味でもない。

クロアチアの残りの三分の二の領土においては、秋が深まるにつれて、クロアチア側が、軍事的な支配を確立することに成功した。そこからは、連邦軍は退却した。退却は、リエカのように流血を伴わずに比較的整然と行われたところもあれば、ザダールのように激戦になったところもあった。

主権国家クロアチアは、セルビア人に占領された地域を放棄する意思はなく、またそうすることはできなかった。同様にセルビア人も、自分たちが故郷とみなしている地域が、独立したクロアチアの一部となることを甘受する意思もなく、またそうすることはできなかった。独立国家クロアチアのなかでは、彼らセルビア人は、正規の市民ではなく、一慎重に表現すれば「嫌われる少数派」に転落することになるからである。

我々西側諸国では、クロアチアの立場は、誰もがよく理解した。他方、セルビアの立場を理解する人は、ほとんど誰もいないに等しかった。

*戦争報道 [大意]

〔スロベニア戦争⁽²²⁾の恐ろしい報道についてはまだしも誇張とみなし得るとしても、今回のクロアチアにおける戦争については、多くのメディアのライブは、文字通りありのままその戦争のすさまじさを映し出さざるを得なかった。すでに「正規兵」からして一般の市民に狂暴に振る舞ったが、特に、しばしば民兵と呼ばれた、制御のきかなくなった集団が、前線の前や後ろで殺戮に走った。

これについても、メディアの報道では、あらゆる犯罪行為の責任を専らセルビア人に負わせるものが多かった。セルビア人が破壊しクロアチア人が専ら防御するというような、それらの報道は、何千人ものセルビア人難民がいることや、ツジマン大統領があちこちの村を解放したり奪還したりしたという成功談とは辻褄が合わないが、誰もそれが気にならなかったようだ。

その一例として、ドゥブロヴニクにまつわる或る出来事を挙げておきたい。^{*8} このアドリア海沿岸の最も美しいユネスコ世界遺産の街に向けてユーゴスラビア海軍の軍艦から砲火が放たれことが映像で映し出され、新聞には、防空用の地下室から抜け出したドゥブロヴニクの市長がドレスデンの同志に

宛てて助けを求める手紙を書いたことが載っていた。その手紙の受取人は、彼の住むドレスデンが1945年に連合軍の爆撃によって灰燼に帰したという体験の持ち主なので、セルビアによるドゥブロヴニク爆撃の意味もよく理解できるはずだ、ということで選ばれたものだったのだろう。このアピールは世界中に知れわたった。ところがこの行動は、PR作戦として考えられたギャグだったのである。しかもそのPRは十分効果を挙げることができた。それ以来、世界の人々に、セルビア人は人間の生命に対してのみならず文化的価値の高いものに対しても尊敬を払わない、と思込ませることができたからである。[……] もちろんドゥブロヴニクも、戦争の被害に苦しんだことは疑う余地がない。しかしそれには、すべての部隊に一当地の場合には特にモンテネグロの部隊が関わっていた一責任がある。いずれにせよ、ドゥブロヴニクと「ドレスデン」の比較は、厚顔無恥というほかない。

クロアチア軍は、国連の武器禁輸措置にもかかわらず、新たな武器を大量に購入していた。大抵はハンガリーやアドリア海経由ということになっていたが、オーストリア経由のものもあった。その上に、連邦軍の武器保管庫のいくつかが彼らの手に落ちた。にもかかわらず、連邦軍の方があきらかに優勢だった。連邦軍の部隊が重い犯罪的行為を行ったことは疑う余地がないが、クロアチアも決してそれにひけをとるものではなかった。そのことは、赤十字やOSZE [全欧州安保協力機構] やヘルシンキ・ウオッチ [アメリカの人権団体] や国連などの国際的な組織の報告書において幾重にも証明されている。また我々のメディアにおいてさえ、個別には採り上げられている。が、これらの情報は、ほとんどかき消されたのである。] *9

* HOS (クロアチア防衛同盟) とその傭兵たち [全訳]

1991年の秋は、無数の停戦協定が結ばれては破棄された時期でもあった。その都度の交渉団は実際真剣に停戦をめざして署名したように見えたときもあった。が、これらの努力はすべて、あらかじめ挫折する運命にあったのだ。なぜなら当地では 完全な指揮系統を有する二つの正規の軍隊どうしが戦っているのではなくて、両軍ともに、軍規から外れた非合法の地域司令官が幅を利かせていて、彼らは、ヨーロッパのどこかの都市で一誰によってであれ一取り決められたことなんか、全く歯牙にもかけなかったからである。

このことは、両軍の公式の兵力についても言えたが、むしろそれ以上に多数の「民兵」についてあてはまった。彼らは、一部は実際に民間からの資金

でまかなわれていたが、また一部は、正規軍のために「汚い仕事」を片付けることによって収入を得ていた。こうして大虐殺の首謀者を覆い隠すことができたのである。アルカン⁽²³⁾率いるセルビアの「虎」やパラガ⁽²⁴⁾率いる札付きの部隊>>HOS<<は、最初に恐ろしい悪名を馳せた民兵集団である。HOSは「クロアチア防衛同盟」の意で、その中には、オーストリアやドイツの傭兵たちが少なからずいて、共に戦っていたが、そのことは、公然の秘密とされていた。パラガは、当時最も有名なクロアチアの政治家の一人だった。彼の率いるHSP [クロアチア権利党] は、選挙ではほとんど意味のある役割を演じることはなかったが、彼の私兵集団は、常に話題に上った。それは、ツジマンにさえ圧力をかけ、前線の背後やまた前面で一のちにボスニアにおいても一大いに関わったのである。

ここでHOSについて、或る個人的なエピソードを記しておきたい。クロアチア戦争の最も激しい段階を過ぎてしばらく経った時期の或る日のこと、私はスネジャナの従妹とザグレブで夕方散歩をし、その機会をとらえて、HOSの本部へ「忍び込もうと」した。その本部は大きな建物で、ザグレブで最も有名なホテル「エスプラナーデ」のすぐ近くにあった。私たちがその近辺を通ったとき、私の好奇心は不安よりも大きくなった。私は勇気を奮い起こし、まず中を覗いてみようと思決心した。(私の不安を理解してもらうには、HOSには一般に非常に野蛮な組織であるとのイメージがつきまとい、チェトニク⁽²⁵⁾のクロアチア版として、それどころか「SS」[ナチスの親衛隊]とも言われていたことを知ってもらう必要がある。) 従妹は私に思いとどまるようにと諫め、私が表向きは平静を装って偶然のようにその建物へ向かってぶらぶら歩いていったとき、彼女は逃げていった。その建物の前には数人の私服の兵士がコルト式自動拳銃を持って見張りのように立っているのが、遠くからでも見えた。

私は立ち止まり、何でもないようなことを何か尋ねようとしたが、すでにその前に、公道で徹底的にボディチェックをされた。私が自分のことを、戦況に関心はあるが情報を得ていないドイツ人であると打ち明けると、私を取り巻いていた人たちの口調は、軍隊調であることに変わりはないが、明らかに好意的なものになった。「ドイツ人は、我々の盟友です。よって、あなたをここへ喜んで迎え入れるものであります。」

このようなきびきびしたドイツ語で話された言葉と共に、私は、薄暗い照明のあるロビーに案内された。そこは、ひと目で、どんな精神がここを支配しているかがわかるような代物だった。無数の旗と並んで、壁には、ウスタ

シャの総統アンテ・パヴェリッチの大きな写真と、壁全体を埋め尽くすような、いわゆる大クロアチアの地図が貼ってあった。それは、現在のクロアチアとボスニア全土およびヴォイヴォディナの大部分から成っていた。私は興味深そうに部屋を見まわし、私を案内してくれた男に、さりげなく聞こえるような質問をいくつかけた。そこには、生き生きとした活動的な空気がみなぎっていた。彼らは私のことを、おそらく一種のネオナチとみなしたのだろう。とにかく私に向かって、新生ドイツ⁽²⁶⁾の偉大さについて芝居がかった祝意を表し、すべてのクロアチア人がドイツと永遠に結ばれていることを誓った。

「多くのドイツ人が我々の隊列で戦っています。彼らは、我々の最高の兵士たちであります。我々はまた非常に多くの武器や軍服やその他の重要なものをドイツからもらっています」と、髪を短く刈り上げた年少の兵士が私に報告した。「いま、我々の時が来たのです。というのは、我々が手を結べば、負けることはないからです。あなた方の頭脳、あなた方の紀律、そして我々の勇気、これらが合体すると真にすばらしいものとなるからです。」

この建物の中にも何人かのドイツ人がおり、その中には、司令官も一人いるとのことだった。すでに電話で、彼が私のために時間がとれないかと尋ねるよう指示を出しているとのことだった。その言葉を聞いて、私は大変気分が悪くなった。このドイツ人司令官は、おそらく今にも階段を下りてきて、私の表情からすぐさま、私が思想的に違う波長に属する人間であることを見てとるに違いない、と、私は確信した。そうすればひょっとしたら面白いことになったかもしれないが、私は、「明日は時間がもっと多くとれるので、また来ます」という言葉を残して、できるだけ素早くこっそり消えた。

HOSや他の民兵集団による殺人的な陰謀については、ドイツ語圏のメディアにおいても報道されることがあった。そのようなものの一つは、発行部数が群を抜いて多いオーストリアの週刊誌『ニュース』の1994年4月号に載ったものである。それは、単にこのような部隊の行動に目を向けた記事であるばかりではなく、この戦争において外国の傭兵が彼らと一緒に行動していることの証言ともなっている。ヴォルフガングという若いネオナチのオーストリア人の話が紹介されているが、彼は、90年代の初め—オーストリアの司法当局から捜索令状が出されたために—バルカンにやってきて、義勇兵として雇われ「ランボーゲーム」(のような戦闘)⁽²⁷⁾に加わった、とのことである。

彼は数年後にオーストリアへ戻り、当局に自首した。彼は、『ニュース』誌の女性ジャーナリストの前でみずからの人生を懺悔し、「クロアチア・ボ

スニア同盟の制裁部隊」の戦闘員として他の外国人傭兵と一緒に何をしたのかを詳しく語った。彼の報告には、切り裂かれた頭部や燃える人体の松明たいまつが出てきて、まさに悪夢を読むようだ。「男も女も子供も虐殺した」と、いまは後悔している、そのランボーが語っている。『ニュース』誌は書いている。「ヴォルフガングは撃ち、戦った。15人殺したあとで、彼はもう死者の数を数えるのをやめた。」

彼を最終的にオーストリアへ帰国させるきっかけとなった決定的な体験について、彼は次のように語っている。「或るドイツ人の傭兵が小さなムスリムの子供に実弾が装填された手投げ弾を玩具として与えたとき、その部隊の30人の兵士たちがまわりを取り巻き、拍手した。」そのあとでそれが爆発したのを聞いたとき、彼は泣きながら目を背けねばならなかった。「あの戦地でのドイツ人やオーストリア人はひどく倒錯した豚どもだ」と、彼は、『ニュース』誌で総括している。

oo

本文中、(1) (2) . . . とあるのは訳注を、* 1、* 2 . . . とあるのは原注を示す。

【訳注】

- 1) Aleksandar Tišma (1924 - 2003): セルビアの作家。第2次大戦中はジャーナリストとして活動し、戦後は1982年まで“Matica Srpska”の編集者として働いたが、1993年以降はセルビアを離れ、パリに住んだ。作品は多くの言語に翻訳され、アンドリッチ賞やオーストリア文学賞などを受賞している。
- 2) Marcel Reich-Ranicki (1920年-) ポーランド生まれのユダヤ系の文芸批評家。1958年から西ドイツに在住し、『ツァイト』紙や『フランクフルター・アルゲマイネ』紙で文芸批評を担当するかたわら、ラジオ番組「文学カフェ」やTV番組「文学カルテット」にも出演し、現代ドイツ語圏文学に最も強い影響力をもつ批評家。多くの編著書のほか、『わがユダヤ・ドイツ・ポーランド』（西川賢一訳、柏書房）、『とぼりを降ろせ、愛の夜よ』（丘沢静也訳、岩波書店）などの自著がある。
- 3) クライナは、クロアチア西部のセルビア人多数地域。スラボニアは、クロアチア東部のセルビア人多数地域だった地域。本稿(1)の訳注(20)

(熊本県立大学文学部紀要第10巻第2号、88頁) 参照。

- 4) サヴォイ出身のイタリア・フランス系貴族。ハプスブルグ家に仕え、対トルコ戦争やスペイン継承戦争の功績で国民的英雄となった。
- 5) Ivo Andrić (1899–1975) ユーゴスラビアを代表するノーベル賞作家。ボスニアに生まれ、十代の頃、オーストリア・ハンガリー帝国からの民族解放運動に参加したため、第一次世界大戦勃発と共に国家反逆罪に問われて投獄される。第一次大戦後、セルビア・クロアチア・スロベニア王国 (のちのユーゴスラビア王国) の外交官として、ヨーロッパ各地を巡る。第二次大戦中は、ナチス・ドイツ占領下のベオグラードで、『トラヴニク年代記』(邦訳『ボスニア物語』)、『令嬢』(邦訳『サラエボの女』)、『ドリナの橋』等の執筆に専念する。戦後、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国の作家協会の初代会長を務め、61年ノーベル文学賞を受賞した。
- 6) セルビア共和国の南に位置する自治州で、州都はプリシュティナ。アルバニア系住民が多数を占め、セルビア系住民も少数派として存在している。現在アルバニア系住民による独立を求める地位確定交渉が最終段階に入っている。しかし、セルビア人にとっては、コソボは、14世紀にオスマン・トルコと戦った中世セルビア王国の中心地であり、民族の故郷であるとの意識が強い。セルビア共和国とコソボ自治州の確執は長期にわたって続いていたが、ミロシェビッチ政権下の1980年代末から90年代にかけて対立が先鋭化し、99年には、コソボのアルバニア系住民に対する抑圧を理由に、NATOが旧ユーゴスラビア連邦に対して78日間にわたって空爆を行うに至った。その後のコソボについては、本書の後掲章(原書293–330頁等) 参照。
- 7) セルビア共和国の北に位置する自治州で、州都はノヴィサド。ハンガリー住民も居住する。
- 8) 本稿(1)(熊本県立大学文学部紀要第10巻第2号所収)、80–84頁参照。
- 9) ジョージ・C・マーシャル(1880–1959)。アメリカの軍人、政治家。第二次大戦中、陸軍参謀総長としてヨーロッパ侵攻作戦を指導し、連合軍を勝利に導いた。1947年国務長官だったときに、「マーシャル・プラン」と呼ばれるヨーロッパ経済復興援助計画を発表し、ヨーロッパの敗戦国や発展途上国に対して、無償もしくは低金利で援助を行うことを提案した。そのプランは、1948–51年にかけて実施され、それを受け入れた西欧諸国は急速に経済復興を遂げ、生活水準が向上したが、ソ連と東

欧諸国はこれをアメリカの帝国主義政策として批判し、これに対抗するためにコミンフォルムを結成した。

- 10) 本稿（1）（熊本県立大学文学部紀要第10巻第2号所収）、70頁参照。
- 11) 1948年、ソ連とユーゴの対立が表面化し、ユーゴはコミンフォルムから追放されたが、その後、労働者自主管理と非同盟政策を柱とする独自の社会主義の道を歩んだ。
- 12) 本稿（2）（熊本県立大学文学部紀要第11巻所収）、66-68頁参照。
- 13) ボスニア・ヘルツェゴビナのムスリム〔イスラム教徒〕は、民族としてのムスリムの承認を求めていたが、1971年の国勢調査以降、セルビア人やクロアチア人と並ぶ主要民族の一つとして公認された
- 14) 1981年コソボ自治州プリシュティナで起こったアルバニア人の暴動。死者11名、負傷者57名。事態の収集が図られたあとも、経済的不満や民族対立が残った。上記注（6）参照。
- 15) 旧ユーゴ元大統領。本稿（1）の訳注（19）（熊本県立大学文学部紀要第10巻第2号、88頁）および上記注（6）参照。国連の「旧ユーゴ国際刑事法廷」に起訴され、審理中だったが、2006年3月12日オランダ・ハーグの拘置施設で死去した。
- 16) 1991年6月、スロベニアとクロアチアの両共和国が独立を宣言した。
- 17) 1970年から71年にかけて、クロアチア共和国の自治や権利拡大をめざして、クロアチア共産主義者同盟の改革派、民族派知識人、学生等を中心起こった運動。このときチトーによって解任された改革派や民族派の知識人や党員の多くは、90年の自由選挙に立候補し、当選した。ツジマンもその一人である。
- 18) 本稿（2）（熊本県立大学文学部紀要第11巻所収）、61-68頁参照。
- 19) 同書、68-72頁。
- 20) ロマンとニナについては、本稿（3）（熊本県立大学文学部紀要第12巻所収）、135-137頁参照。
- 21) 本稿（3）（熊本県立大学文学部紀要第12巻所収）141頁および注（9）参照。
- 22) 1991年6月、スロベニアで独立宣言がなされたあと、連邦人民軍と共和国軍が衝突し、連邦軍が敗退した「十日戦争」。本稿（3）（熊本県立大学文学部紀要第12巻所収）127-130頁参照。
- 23) 本名ジェルコ・ラジュトナビッチ（1954-2000）。セルビア共和国の議員でサッカーの「レッドスター」のファンクラブの会長でもあったが、

私兵集団「虎」の暴行ぶりで悪名を馳せ、麻薬や密輸や暴力との関係が絶えず取り沙汰され、スキャンダルと謎に包まれたまま、2000年ベオグラードのホテルのロビーで暗殺された。

- 24) ドブロスラヴ・パラガ (1960-) 当初、ツジマンのクロアチア民主同盟に加わっていたが、交渉によってクロアチアの独立を獲得するという路線に飽きたらず、クライナ共和国と連邦軍への武力行使を主張し、みずからクロアチア権利党を創設し、その党首となった。
- 25) 本稿(1)訳注(11) (熊本県立大学文学部紀要第10巻第2号87頁) 参照。
- 26) 1990年10月3日の東西ドイツの統一を指している。
- 27) ベトナム戦争の特殊部隊で活躍した男ランボーを主人公とした同名の映画に由来する表現で、見境ない殺戮や過激な戦闘行為を指している。

[原注] (訳注と重複するものは省く)

- * 1 Josip Strossmayer (1815-1905), 南スラブ統一のために戦った先駆者。
- * 2 『ブロックハウス』百科事典 (全24巻)、第19版、第1巻、1990年、マンハイム発行、340頁。
- * 3 Karlheinz Deschner: >>Katholische Schlachtfeste in Kroatien” in: >>Mit Gott und dem Führer<<, Köln 1988 などを参照。
- * 4 Karlheinz Deschner, Milan Petrovic: >>Krieg der Religion<<, München 1999, 258頁、参照。
- * 5 チトー (Tito) という名前は、“ti-to” (ドイツ語の “Du- das”) [君— それ] という意味であり、「君はそれを (やりなさい)」という、彼が命令や指示を与えた際にしばしば (短縮化して) 用いた表現からきているとのことである。
- * 6 『ブロックハウス』百科事典、上掲、第11巻、270頁。データは1981年のもの。
- * 7 『シュピーゲル』1990年4月16日号、174頁。
- * 8 Mira Beham: >>Kriegstromein<<, München 1996, 注36、252頁参照。
- * 9 関連文献として、下記のもの挙げられている。
Beham, Mira: Kriegstromein. Medien, Krieg und Politik. München 1996.
Bittermann, Klaus (Hg.): Serbien muss sterben. Berlin 1994.
Brey, Thomas: Die Logik des Wahnsinns. Freiburg i.B. 1993.
Elsässer, Jürgen : Kriegsverbrechen. Hamburg 2000.
Glenny, Misha: Jugoslawien: Der Krieg, der nach Europa kam. München 1993.